

# 「イノベーション北京・国際フォーラム(2017)」に参加して

ERINA 調査研究部長・主任研究員  
新井洋史

2017年12月7～8日、北京市科学技術研究院の主催で「イノベーション北京・国際フォーラム(2017)」が開催された。ERINAは、同研究院傘下で今回の会議の事務局を務めた北京科学学術センターと研究交流協定を締結しており、その縁で会議への招待を得た。今回の会議の副題は、「科学技術イノベーションセンターの建設促進とイノベーション主導型発展の推進」というものであった。主催者の北京市科学技術研究院は、北京市の科学技術政策についてのシンクタンクであり、また科学技術研究を推進する組織でもある。IOTやAIを用いた第4次産業革命の到来などが重要な政策課題となる中、「イノベーション」を看板とした会議を主催するのは時宜にかなっている。と同時に、この会議にはもう一つ重要なテーマがある。それは、新しい北京市の都市像

を探るという課題である。北京を中心とした地域では、国策として北京市・天津市・河北省を一体化する政策、その一環としての「雄安新区」整備プロジェクト、さらに北京市の行政機能を郊外副都心に移転するプロジェクトなどが進行中である。したがって、会議では科学技術研究、技術革新、知的財産保護など科学技術政策に関わる一連の発表のほか、都市問題に関連した一連の発表もあった。

科学技術政策に関しては、中央の科学技術部や北京市政府の幹部を含む行政組織・団体から、現在展開されている様々な政策、事業の紹介があった。商都ではない北京市の発展戦略として、科学技術振興や開発研究機能強化を柱にしようとの意図が感じられた。研究者サイドからは、世界における中国の位置づけ、中国における北京や他都市の位置づけにつ

いての分析などが発表された。例えば、北京市科学学術センターの張士運主任は、独自に開発した指標で主要都市のイノベーション力を計測する試みを紹介した。具体的には、各種の統計指標を総合して「集聚力」、「創造力」、「推進力」、「輻射力」、「主導力」の5つの機能別に評価した結果を踏まえ、北京市は「集聚力」と「推進力」に一層注力すべきであるとの結論を示した。また、論文発表数や引用数等に基づいて、世界における中国の位置を評価する試みは多くの研究者が行っている。総じていえば、中国は「量」の面で日本やドイツなどを上回りつつあり、米国に次ぐ地位にあると評価する向きが多いようだ。他方、特定の先端分野などや「質」の面では、中国は一層の努力が必要だとの指摘もあった。

都市問題については、主に外国からの

参加者が発表した。印象深かったのは、ドイツのフラウンホーファーシステム・イノベーション研究所のヌート・コシャツキー所長の発表で、イノベーションを生み出す場としての都市機能を強調していた。例えば、「文化は見えないインフラである」あるいは「交流や共有の場としての都市が組織のイノベーションをもたらす」といった指摘など、文明論に近いような広い視野での論点には大いに共感した。同氏は都市が多くのCO<sub>2</sub>を排出しているという負の面に触れたが、環境問題については別のセッションでフィンランドのエチカ社の創設者でチーフコンサルタントでもあるマリ・ラウダスコスキ氏が循環経済を主題として発表した。同氏は、循環経済への移行には多くのイノベーションが必要となることから、循環経済を目指すことがイノベーションの促進につながると主張した。筆者は、日本の首都圏における都市機能再配置の経緯や教訓等について発表した。副都心や業務核都市の成否に係る文脈で述べた「人が人を惹きつける」との発言に対して、会議運営の実質責任者でもある張主任から強い関心を示していただいた。

ところで、今回の会議は、研究者の評価のあり方に関わる問題を改めて考える機会となった。近年、引用数に基づく学術雑誌の権威づけと権威ある雑誌への掲載数による研究者評価という仕組みが、学術界に広く普及し、深く根付いてきている。同時に、こうした仕組みへの疑問も多

く提示されているが、問題はあっても代替策がないということで、少しばかりの改善策を施して利用されているものと思われる。今回の会議での発表の中に、共著・引用に関するデータを用いて、特定分野での世界的な権威のある研究者を中心とした研究ネットワークの分析を行ったものがあった。コアとなる研究者ネットワークの存在意義を強調する内容であり、このことが筆者の以前からの疑問を大きく膨らませた。現在でも中国人研究者は世界各地で活躍しており、その流れは一層拡大するだろう。将来、「華僑研究者」人脈による研究交流が国際社会で大きな位置を占めるようになると、上記のような研究者評価の

歪みが一層拡大するのではないか。中国人に限らず、引用数を増やすために相互引用を申し合わせるといった、不純な動機に基づく研究交流もあると聞く。母国語でそれができる、あるいは扱い慣れた素材でそれができるとなれば、在外研究者が誘惑を感じる可能性は高い。自然科学はともかく、社会科学や人文科学では、「中国関連の論文が増えれば、引用数が増えて、雑誌の評価が高まる」というプロセスが、最終的に中国専門誌の総合誌に対する優越をもたらすところまで行きつくかもしれない。研究者評価手法の分野にこそ、イノベーションの必要性が切迫しているのではないだろうか。



(出所) 筆者撮影